

史料紹介

丹羽家文書『御組由緒記』

——二條城守衛與力由緒記録——

渡 邊 忠 司

解題

一 『御組由緒記』発見の経緯

ここに紹介する『御組由緒記』は丹羽氏昭氏（京都市在住）所蔵の二条城御門番與力の由緒記録である。史料は宝暦五年（一七五六）十二月の作成と見られ、当該期の御門番頭金田仁十郎組の与力一〇騎の由緒が記される。

本史料は、御門番与力丹羽氏の子孫であり、現在の御当主である氏昭氏が所蔵される二条城守衛関係の史料群の一つである。京都所司代や町奉行所の与力・同

心ではなく、二条城守衛の与力・同心の記録という点では新出の史料であろう。その意味では「発見」といえよう。

新出史料の確認に至る経緯は、筆者が佛教大学四条センターで公開講座を担当している際に、聴講されていた丹羽氏から与力関係の史料を所蔵されているとの情報をもたらしていただいたことに始まる。二〇〇八年度の講座であったが、二〇〇九年六月には丹羽氏のご自宅にお伺いして、さっそくに史料を拝見させていただいた。最初丹羽氏はご自身の先祖が京都町奉行所の与力であったのではないかと仰っておられたが、史

料を点検させていただくと、与力であったことは間違いないが二条城の守衛関係の与力であったことが判明した。

史料群は、早く目録を作成することが必要と考え、借用を願い出たところ快くご許可をいただき、現在鋭意その作業に取り組んでいる。途中経過であるが、現在確認できた総数は約五〇〇点である。

史料群のなかに丹羽氏関係の系譜や記録に限らず、京都在住の与力・同心、また二条城御門番の与力・同心全体の由来に関する記録も含まれている。

二 二条城の守衛と与力・同心

徳川政権下の二条城は慶長六年（一六〇一）から築城が始まり、八年に完成した。織田信長・豊臣秀吉と続く京都での城郭築造の集大成でもあった。二条城は京都を支配下においた徳川政権の象徴として、また禁裏・公家勢力に対する武家政権の覇権・威圧の象徴として位置づけることができる。築造は徳川政権が諸大名に命じ、その助力によって築造された。

慶長五年以降徳川政権は京都統轄のために、当初は奥平信昌と加藤正次を配置して市中取締に当たらせ、同六年九月に「京都の三奉行」と呼ばれた加藤・米津勝清・板倉勝重を奉行として配置し、直後の九月二八日には勝重を京都所司代に任命して、支配行政体制の整備を行っている（『寛政重修諸家譜』第二巻・第九巻、『徳川実紀』第二巻、『京都御役所向大概覚書』第一巻、『京都の歴史』第三巻）。

以後京都所司代は京都市中の市政・治安維持などに当たり、元和元年（一六一五）の豊臣氏滅亡による大坂直轄、および二条城築城に伴う畿内・西国への軍事的備えの変化など、その統括者としての地位も担った。さらに元和五年には伏見城代の廃止、大坂城代の設置があり、伏見城代であった内藤信正が大坂城代にかわった。また大坂には同年大坂町奉行が置かれ、畿内・西国の政治的・軍事的備えの新たな態勢づくりも始まった。

このような徳川政権成立当初の変化のなかで、政治・軍事拠点としての二条城の守衛は、当初は二条城

代が軍事的役割を担い、それに二条在番の大番頭・城番らが昼夜交代で守衛を担当した。宝暦九年版の『京都武鑑』（叢書京都の歴史7・8、京都市歴史資料館）によると、所司代のもとに二條在番大番頭（二名）、二條城御城番（二名）、二條城御殿番（一名）・御鉄砲奉行（二名）・御蔵番（二名）のもとに与力・同心が配属されている。

なお二条城代は元禄一二年（一六九九）に廃止され、職務は城番に引き継がれたとされる（『国史大辞典』）が、名称そのものは残されており、所司代の家臣が城代を勤めるようになったとみられる。ちなみに宝暦九年の所司代の下では、その家臣である年寄・用人・番頭・公用人・取次らと並んで城代に就いた二名が記されている。

この体制が整ったのは寛永二年（一六二五）に伏見城の天守が二条城に移築され、伏見城を守衛していた城番頭とその与力・同心らが二条城の守衛に配置換えされたときである。この経緯は『御組由緒記』に精しい。

二条城御門番としての与力・同心は城番の配下に配属され、「御城番組」と称されていた。宝暦九年時点では二條城御城番には大岡金兵衛・金田仁十郎を御門番頭として、御城番組二組が配置され、それぞれに与力一〇騎と同心二〇人が配属されていた。総数は二〇騎・同心四〇人となる（『京都武鑑』上、前掲叢書京都の歴史7）。与力・同心は徳川政権成立期以後二條城守衛役職と与力・同心の職名・配属人数に変遷があるが、その詳細についてはここでは述べない。

三 史料の概要と意義

『御組由緒記』は縦帳で、丁数は六一丁である。史料の状態を見ると、人別由緒を書き上げた帳面の紙背を用いたと見られ、差し出した清書（清帳）ではなく下書である。下書のために挿入や書き換え・書き加えの箇所が多数散見されるが、内容は提出分と同じとみてよい。

記述の内容は御門番組の由緒が前段に置かれ、引き続いて二條城与力金田仁十郎組一〇騎の由緒書が記さ

れる。御門番組の成立由緒があることから、これまで未解明の御門番組と与力の実態を明らかにする糸口になる記録であろう。

由緒書作成の経緯は史料原文にその概略が記される。それによると、所司代が上京または参府の際に書き上げた先格に従って書き上げたとあり、また今度は由緒書だけでなく人別由緒も書き上げたと記している。

右御組由緒書者是迄 御所司代様初而被遊御上京
又者被遊御参 府候節奉申上候先格二御座候、然
処今度被 仰渡人別由緒奉書上候得共、元来私共
義者当時久留半次郎御組筋江被 召出候御組筋之
者共二御座候故、頭前録等入組紛敷御座候二付初
口ニ書記仕候、

これによると、由緒書の作成は所司代の上京、つまり京都への赴任時と江戸参府に対応して書き上げられることが慣例であったとみられる。それが宝暦五年の場合には由緒書とともに人別由緒も書き上げるようにとの指示があったと記されている。またここには御門番組の「前録」などが入り組んで紛らわしくなるので、

最初にそれを記したとある。なお久留半次郎とは、この時点での御門番組の頭である

由緒書は、宝暦五年時点での与力本人の来歴と高祖父・曾祖父・祖父・父の順で、それぞれの履歴が記されている。その記録によると、宝暦五年時点での丹羽家の当主は丹羽亦五郎であった。

ところで、これまで京都所司代や京都町奉行、京都代官あるいは伏見町奉行などの支配行政については、いくつかの史料群が知られ、十分とはいえないがそれなりに研究が進められ、解明されてきた。その大きな成果は『京都の歴史』であり、『京都町触集成』であろう。しかし、二条城番や門番あるいは所司代・町奉行、また伏見などの与力・同心の実態や職務については、まったくといってよいほど進展していない。もちろん『京都の歴史』や『京都町触集成』などの叙述や翻刻を通じて、それらに関係する限りでは一定の研究がされているが、与力・同心個々の史料による事例は圧倒的に少ない。

二條城には、近世京都の町絵図をみると、東門・西

門・北門があることが読み取れる。『京都御役所向大

概覚書』や『京都武鑑』など、公刊されている史料類をみると、二条城には大番頭・御城番と御門番頭二名のもとに一組に与力一〇騎と同心二〇人が配属されて昼夜守衛にあたっているが、その与力・同心に関する史料も研究もほとんどない状況にある。その意味から今回の二条城西門与力の記録は最初の発見と考えられ、二条城守衛体制の解明に大きな意義を有している。

丹羽氏所蔵の史料群は、京都市中および禁裏、二条城また伏見地域に関する徳川政権の支配行政体制と二条城を中心とした軍事的備え、主に平常時の守衛体制を把握するうえで貴重である。

四 丹羽氏の系譜

最後に、史料群の所蔵者である丹羽氏の系譜に触れておきたい。丹羽氏はもとは三河国幡豆郡吉良の庄一色（愛知県幡豆郡一色町）に居住していた。二条城守衛与力の丹羽氏は、宗家の一二代目氏識の七男氏俊を祖としている。氏俊は幼名六郎で、成人後は金右衛門

と名乗った。

系譜をみると、丹羽氏宗家は『寛政重修諸家譜』第八十五（以下『諸家譜』と略、『寛政重修諸家譜』第二、一六九頁）には、

もとは、一色を称す。氏明がとき尾張國丹羽郡にうつり住せしにより、丹羽にあらたむ。

と記され、『諸家譜』に記された初代は直氏、四代目の丹羽平三郎氏明のときに丹羽郡に移住した。氏明の記事には「尾張國丹羽郡にうつり、これより氏範にいたるまでこの地に住す」とある。

この後、五代目氏従の時に尾張國愛知郡折戸村に移って城を築き、六代目氏貞の時には愛知郡本郷、さらに八代目氏清の時に愛知郡岩崎に移り岩崎城を築いた。氏識・氏勝と続き、氏次の代に織田信長に仕え、本能寺の変以後に信雄に属していたが、勘氣を蒙って家康の麾下に入つたと記している。

『諸家譜』の記事をみると、氏俊は慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原役後家康に仕え、その後には伏見城春日丸を守衛したとある。

慶長五年関原御合戦の、ち、めされて東照宮につかへたてまつり、伏見城の春日丸を衛る。寛永二年彼城の天守を二條城にうつさるゝのとき、二條番衛の與力となる。

これによると、丹羽氏が二條城の与力となつたのは寛永二年（一六二五）以降のこととなるが、これ以後の系譜は紹介する『御組御由緒記』に詳しい。

【付記】なお今回、ここに貴重な史料の紹介が実現したのは、偏に現在の御当主氏昭氏のご好意による。史料の借用と利用、また翻刻・掲載について、快くご許可していただいたことに心より感謝申しあげたい。また今後とも一艘のご協力をお願いする次第である。

【凡例】

一 本稿は二条城守衛の御門番組与力の由緒書である。一翻刻に当つては原文の体裁に従つたが、読解の便宜のため読点をいれた。他の表示は次の通りである。

(一) 平出・台頭・欠字は原文のまま残した。

(二) 虫損は「ムシ」、破損は字数が推測出来る場合は□□、出来ない場合は「」で示した。

(三) 貼紙・付箋等の箇所は、(付箋)「」の形式で表示した。

一翻刻に当つては、原則として常用漢字を用いたが、固有名詞や地名などそれにならないものは正字体を用いた。但し、次の異体字・俗字・合体字・かなについては原文のままに残した。

者(は) 而(て) 与(と) 并(並) 方(より)

江(え) 茂(も) 躰(体) 帋(紙) 亼(事)

一翻刻・校訂者による注記については、次のように示した。

(一) 下書のために挿入や書き加えなどがあるが、それは原文の状態で翻刻した。

(二) 誤字・脱字・当て字などについては、判明する限りで右端に注記するか、(ママ)と示した。

〔表紙〕
『御組由緒記』

御組與力由緒書

當時御切米拝領高

現米六拾壹石三斗五升宛

與力拾騎

権現様 御代当二條 御城 御天守伏見ニ御座候節、

閑ヶ原御陣御勝利以後慶長七壬寅年春日下総高野
山ニ蟄居之處被為 召出、伏見御城番被為 仰付、

現米貳千石ヲ以御吟味之上與力三拾騎被為 召出

下総江御預ヶ 御城御番相勤申候、其砌與力共甲

前立物金之輪抜指物二幅四半地花色向紋銘々自分

紋ニ被為 仰付、只今ニ至伝来仕罷在候、右御城

番元御組助者當時久留半次郎御組ニ而御座候、最

初慶長七壬寅年^b当宝曆五乙亥年迄百五拾四年罷成

候、

大猷院様 御代寛永元甲子年伏見

御城[㊤]御天守[㊤]当二條[㊤]

江被為^{イミカ}

移候、其節春日下総跡御役嫡子春日左衛

門江被為 仰付候三拾騎之與力共者翌乙丑年当二條

江引越、春日左衛門支配ニ而当二條 御城東追手

御門御番相勤申候、此時左衛門^〇差図ニ而與力三

後入^〇与力共江被申談

拾騎惣御切米現米貳千石之内現米貳百石被相分、

同心拾五人被召抱、御切米拾三石六斗宛ニ而下番

相勤申候、右拾五人之同心家筋之者共六人者今以

御扶持方無御座、拾三石六斗宛拝領仕罷在候、当

時久留半次郎組筋往古頭曲淵市太夫支配之内貞享

三丙寅年夏御借米拝領之節迄者請取御証文ニ茂御預

之與力与計被認候、<sup>同年冬御切米之節方御願
之与力・同心与相改申候、</sup>

一当御組之義者御組最初頭柘植三之丞儀元伊賀国松

徳村之住人ニ而御座候処、天正十壬午年

権現様伊賀越[㊤]還御之節忠節之儀御座候、依之慶長四己

亥年被為 召出、伏見 御城御門番頭被為 仰付

候、則三之丞生郷松徳村之者共貳拾人御吟味之上

被為 召出、拾石三人扶持宛被下置三之丞江御預、

伏見 御城御門番相勤申候、寛永元甲子年伏見

御城 御天守当二條江被為 移候ニ付、三之丞儀

右式拾人之者共茂召連小屋建被為 仰付、御城西[㊤]

御門奥 御番所相勤申候、其後寛永十九壬午年

御城代渡邊山城守殿附同心八人御增人被為 仰付、

此時^b御組同心貳拾八人ニ罷成申候而、往古與

力者無御座候、

台徳院様 御遺物之御金寛永九壬申年十二月御譜代並

二頂戴仕候、

大猷院様 御代寛永十二乙亥年御金貳千兩與力三拾騎江

拝借被為 仰付、明暦元乙未年迄貳拾々年賦二上

納仕、則皆上納、請取御証文唯今二所持仕罷在候、

一寛文元辛丑年、當時久留半次郎御組往古頭鈴木長

左衛門御役被為 仰付候砌迄者御城番頭御役宅江

其時之御所司代被為 御出、與力共被成御引渡候、

則長左衛門へ御役被為 仰付候節之

御奉書写左二書記仕候、

御奉書之写

鈴木長左衛門事其許大御番頭其外諸役人之面々相

談、万事其方得差図御番可勤仕旨 御直二被 仰

含之被下、御暇被差遣之間、右之面々此趣可申渡

候、然者本間五郎左衛門元與力引渡、長左衛門隨

下知、如前々御番相勤候様二與力共江可被申付候、

本間長左衛門儀者植村帶刀焔參之節一同二可罷下

候由、是又可在謁達候、委細長左衛門可為演說候、

恐々謹言、

三月十八日

牧野佐渡守殿

右之御奉書三輪市郎兵衛「(被説力)」候、

嚴有院様 御代延宝四丙辰年迄者当御組二與力無御座、

同心貳拾八人三而西御門 御番所相勤来候処、其

節之頭水野甚五左衛門依願與力三拾騎之内六騎

当御組へ被為分、此時六西御門御番所二與力老人

宛上番相勤申候、依之御城番組三拾騎之與力貳拾

四騎二罷成候、

一元禄十二己卯年迄者御城番組與力御番勤方一番

組・二番組・三番組与組合、東追手御門御番所相

勤申候、組頭役三人被仰付勤役仕候処、御組分以

後相止、當時片組二同心支配役式人宛勤役仕候、

一延宝六戊午年六元禄二己巳年迄之内者当国近鄉村里

狼荒候節又者猪鹿作毛荒候節、百姓共狩之儀奉願

稻葉美濃守

阿部豊後守

松平伊豆守

酒井雅樂守

候得者御所司代様[㊤]頭方江被仰渡、当御組與力・同心度々獸狩相勤申候、

常憲院様 御代元禄十二己卯年御所司代松平紀伊守殿

御在役之節、當時久留半次郎御組筋往古頭山岡七右衛門儀者御役替被為 仰付未在京之節、其節当御組頭鈴木市兵衛儀者御役御免^ニ而、兩御組共山岡七右衛門從支配之節兩御組與力都合三拾騎、同心都合四拾三人之内與力拾騎・同心三人勤之年數を以御減少被為 仰付、相殘候與力式拾騎・同心四拾人を與力拾騎・同心式拾人宛平均^ニ兩御組与被為 御定分、御城東西御門番所十日代り^ニ相勤候様^ニ被為 仰付、御城番之名目此節^ニ相止、兩頭無差別同格^ニ御門番頭与被為 仰付候、兩御組之儀者御譜代同前^ニ被為 思召上候段、松平紀伊守殿被仰聞候間、此後人少^ニ茂罷成候得者猶以御奉公大切^ニ相勤候様^ニ山岡七右衛門被申渡候、右七右衛門跡御役美濃部彦左衛門、当御組之頭鈴木市兵衛跡御役柘植三之丞同時^ニ御役被蒙 仰被致上京、與力拾騎・同心式拾人宛支配^ニ而東西御門

御番所十日代り^ニ相勤申候、今以右之通相勤罷在候、

但右之通御組分御座候迄者與力御切米高不同御座候處、此節^ニ兩御組式拾騎之與力御切米高平均^ニ被為 仰付候^ニ付、壹人前^ニ現米六拾壹石三斗五升宛拝領仕来候、

一前段^ニ奉申上候御減少之與力拾騎・同心三人之者共者山岡七右衛門江戸御表江帰着之上、兩御組由緒を以御願被申上、翌辰年迄^ニ諸御組^ニ御入人被為 仰付候、其砌於

御殿中 御老中様方山岡七右衛門元組之儀者御譜代同前^ニ被為 仰付候段被仰渡之旨七右衛門^ニ元御組與力共江被申越難有奉存候、無怠御奉公仕候者共代御番奉願候節者願之通被為 仰付被 下置、或者忤幼年^ニ御座候而御奉公難相勤者御座候節者宥抱被為 仰付、万一宥抱人不意之儀茂御座候得者再宥抱等被為 仰付、御奉公相統仕難有奉存候、但御減少之与力拾騎之内三人貞享年中御組^ニ明キ

御座候節、右明跡之儀者死失後代御番可奉願親類

并御組内ニ御奉公可相勤頃立候者無御座候ニ付、

江戸

御表御手鷹匠、平御勘定、火之御番方御切米者自

分拝領高ニ而御入人ニ被為 仰付候者共ニ御座候、

依之減少之節右三人之者共者江戸御表へ被 召出

候、

右御組由緒書者是迄御所司代様初而被遊御上京

又者被遊御参 府候節奉申上候先格ニ御座候、然

処今度被 仰渡人別由緒奉書上候得共 元来私共

義者當時久留半次郎御組筋江被 召出候御組筋之

者共ニ御座候故、頭前録等入組紛敷御座候ニ付初

口ニ書記仕候、

一

由緒書

御切米

現米六拾壹石三斗五升

本國出羽
生國山城

二條 御城御門番之頭
金田仁十郎組與力

金原政之丞

当亥五拾五歲

甲前立物金輪拔

指物二幅四半地花色自分紋最初組被。三ノワ召出

候節被為 仰付、至唯今奉守 仰伝来仕候、

有德院様 御代私儀享保五庚子年四月 御所司代松平

伊賀守殿御在役頭曲淵十左衛門支配之節、父金原

嘉兵衛跡代番被 召出、当亥年迄三拾六年御奉公

相勤申候内、当頭金田仁十郎支配寛延二己巳年八

月同心支配役被申付、七年以来役儀相勤罷在候、

一祖父

金原佐五右衛門

嚴有院様 御代寛文元辛丑年四月 御所司代牧野佐渡

守殿御在役、頭鈴木長左衛門支配之節組與力ニ被

召出、元禄三庚午年迄三拾年御奉公相勤、相願御

奉公引退、正徳三癸巳年十月病死仕候、

一父

金原嘉兵衛

常憲院様 御代元禄三庚午年十月 御所司代内藤大和

守殿御在役、頭曲淵市太夫支配之節父金原佐五右

衛門跡代番被 召出、享保五庚子年迄三拾一年御

奉公相勤申候内、享保二丁酉年七月頭曲淵十左衛

門支配之節同心支配役被申付、四年相勤、病身ニ

付相願御奉公引退、延享二乙丑年二月病死仕候、

右祖父金原佐五右衛門寛文元辛丑年被 召出、私

迄三代相続仕、当年迄都合九拾五年御奉公仕候、以上、

宝曆五乙亥年十二月

金原政之丞

二

由緒書

御切米

現米六拾壹石三斗五升

二條御城御門番之頭
金田仁十郎組與力
本国丹波 生国山城 内藤金右衛門

甲前立物金輪拔

指物二幅四半地花色自分紋最初組被 召出候節

被為 仰付、至唯今二奉守 仰伝来仕候、

有徳院様 御代私儀内藤金右衛門養子二仕置、享保十

六辛亥年十一月御所司代牧野河内守殿御在役、頭

秋山吉右衛門支配之節、養父内藤金右衛門跡代番

被 召出、当亥年迄貳拾五年御奉公相勤候内、当

頭金田仁十郎支配寛延四辛未年九月同心支配役被

申付候、五年以来役儀相勤罷在候、

一

内藤金右衛門

有徳院様 御代享保九甲辰年四月 御所司代松平伊賀

守殿御在役、頭秋山吉右衛門支配之節、当組與力

石川三助明跡江与力二被 召出、享保十六辛亥年十一月迄八年御奉公相勤、病身二付相願御奉公引退、元文四己亥未年十月病死仕候、

右養父内藤金右衛門享保九甲辰年被 召出、私迄

二代相続仕、当亥年迄都合三拾貳年御奉公仕候、

以上、

宝曆五乙亥年十二月

内藤金右衛門

三

由緒書

御切米

現米六拾壹石三斗五升

二條御城御門番之頭
金田仁十郎組與力
本国参河 生国丹波 丹羽亦五郎

甲前立物金輪拔

指物二幅四半地花色自分紋最初組被 召出候節

被為 仰付、至唯今奉守 仰伝来仕候、

有徳院様 御代私儀叔父丹羽熊右衛門養子二仕置候処、

享保二十乙卯年正月 御所司代土岐丹後守殿御在

役、頭杉山吉右衛門支配之節、養父丹羽熊右衛門

跡代番被 召出、当亥年迄二拾壹年御奉公相勤罷

在候、

一高祖父 丹羽 三右衛門

大猷院様 御代寛永二乙丑年四月 御所司代板倉周防

守殿御在役、頭春日左衛門支配之節組與力ニ被

召出、承応二癸巳年十二月迄式拾九年御奉公相勤、

病身ニ付相願御奉公引退、寛文七丁未年七月病死

仕候、最初被 召出候節之月相知不申候、

一曾祖父 丹羽 学 兵衛

嚴有院様 御代承応二癸巳年十二月 御所司代板倉周

防守殿御在役、頭寛新太郎支配之節父丹羽三右衛

門跡代番被 召出、元禄五壬申年。組頭役被仰付、

同十二己卯年組分後頭柘植三之丞支配之節同心支

配役被申付、同十三庚辰年九月迄四拾八年御奉公

相勤、病身ニ付相願御奉公引退、同十四辛巳年七

月病死仕候、

一祖父 丹羽 覚 兵衛

常憲院様 御代元禄十三庚辰年九月 御所司代松平紀

伊守殿御在役、頭柘植三之丞支配之節父丹羽学兵

衛跡代番被 召出、享保四己亥年頭曲淵十左衛門

支配之節同心支配役被申付、同八癸卯年十二月迄

式拾四年御奉公相勤、病身ニ付相願御奉公引退、
同十四己酉年九月病死仕候、

一父 丹羽 熊右衛門

有徳院様 御代享保八癸卯年十二月 御所司代松平伊

賀守殿御在役、頭秋山吉右衛門支配之節父丹羽覚

兵衛跡代番被 召出、頭同支配之節同二十乙卯年

正月迄拾三年御奉公相勤、病身ニ付相願御奉公引

退、延享元甲子年二月病死仕候、

右高祖父丹羽三右衛門寛永二乙丑年被 召出、私

迄五代相続仕、当亥年迄都合百三拾壹年御奉公仕

候、以上

宝曆五乙亥年十二月 丹羽 亦五郎

四 由緒書

御切米 二條 御城御門番之頭

現米六拾壹石三斗五升 金田仁十郎組與力 本國尾張 関戸久之丞 生国山城 当亥四拾歳

甲前立物金輪抜

指物二幅四半地花色自分紋最初組へ被 召出候

節被為 仰付、至唯今奉守 仰伝来仕候、

有徳院様 御代私儀享保二十乙卯年十月 御所司代土

岐丹後守殿御在役、頭秋山吉右衛門支配之節、兄

関戸常八跡代番被 召出、当亥年迄式拾壹年御奉

公相勤罷在候、

一曾祖父

関戸 次郎兵衛

大猷院様 御代寛永十五戌寅年四月 御所司代板倉周

防守殿御在役、頭春日左衛門支配之節組與力二被

召出、万治元戌年迄式拾壹年御奉公相勤、病身

二付相願御奉公引退、万治三庚子年八月病死仕候、

最初被 召出候節之月相知不申候、

一祖父

関戸 市助

嚴有院様 御代万治元戌年 御所司代牧野佐渡守殿

御在役、頭寛新太郎支配之節父関戸次郎兵衛跡代

番被 召出、元禄四辛未年迄三拾四年御奉公相勤、

病身二付相願御奉公引退、元禄七甲戌年五月病死

仕候、父代番二被召出候節之月相知不申候、

一父

関戸 直右衛門

常憲院様 御代元禄四辛未年十一月 御所司代小笠原

佐渡守殿御在役、頭曲淵市太夫支配之節、父関戸

市助跡代番被 召出、宝永七庚寅年迄式十年御奉

公相勤、四月病死仕候、然所関戸常八儀幼年二而

御番難相勤候二付、親族之内関戸藤兵衛卜申者有

抱奉願候、御所司代松平紀伊守殿御在役、頭小西

助右衛門支配之節同年八月願之通宥抱被 仰付、

正徳二壬辰年迄三年御奉公相勤、十一月病死仕候、

常八儀未御番難相勤候二付、親族之内小野田宇右

衛門与申者江再宥抱奉願候、

一異父

小野田宇右衛門

文昭院様 御代正徳二壬辰年十二月 御所司代松平紀

伊守殿御在役、頭小西助右衛門支配之節、願之通

看抱被 仰付、享保十乙巳年迄拾四年御奉公相勤、

病身二付相願御奉公引退、元文五庚申年四月病死

仕候、

一兄

関戸 常八

有徳院様 御代享保十乙巳年十月 御所司代牧野佐渡

守殿御在役、頭秋山吉右衛門支配之節、異父小野

田宇右衛門跡代番被 召出、同式拾乙卯年迄拾壹

年御奉公相勤、病身二付相願御奉公引退申候、

右曾祖父関戸次郎兵衛寛永十五戌寅年被 召出、

私迄六代相統仕、当亥年迄都合百拾八年御奉公仕候、以上、

宝曆五乙亥年十二月 関戸久之丞

五 由緒書

御切米

現米六拾壹石三斗五升

二條 御城御門番之頭
金田仁十郎組與力
本国丹波 生国山城 内藤勝之進
当亥三拾五歳

甲前立物金輪貫

指物二幅四半地花色自分紋最初組被 召出候節

被為 仰付、至唯今奉守 仰伝来仕候、

有徳院様 御代私儀当組二相勤罷在候兄内藤金右衛門

手前同居仕罷在候处、元文二丁巳年十月 御所司

代土岐丹後守殿御在役、頭秋山吉右衛門支配之節、

当組與力加藤弥五右衛門明跡へ與力二被 召出、

当亥年迄拾九年御奉公相勤相勤罷在候、以上、

宝曆五乙亥年十二月 内藤勝之進

御切米

現米六拾壹石三斗五升

二條 御城御門番之頭
金田仁十郎組與力
本国參河 生国山城 渡邊儀右衛門
当亥三十五歳

甲前立物金輪貫

指物二幅四半地花色自分紋最初組被 召出候節

被為 仰付、至唯今二奉守 仰伝来仕候、

有徳院様 御代私儀渡邊一学病身二付養子仕、寛保元

辛酉年十二月 御所司代牧野備後守殿御在役、頭

秋山吉右衛門支配之節、養父渡邊一学跡代番二被

召出、当亥年迄拾五年御奉公相勤罷在候、

一高祖父 渡邊勘右衛門

嚴有院様 御代万治元戊戌年 御所司代牧野佐渡守殿

御在役、頭本間五郎左衛門支配之節組与力二被

召出、万治三庚子年迄三年御奉公相勤、病身二付

相願御奉公引退、貞享四丁卯年三月病死仕候、最

初被 召出候節之月相知不申候、

一曾祖父 渡邊勘右衛門

嚴有院様 御代万治三庚子年 御所司代牧野佐渡守殿

御在役、頭本間五郎左衛門支配之節父渡邊勘右衛

門跡代番二被 召出、貞享二乙丑年迄貳拾六年御

六

由緒書

奉公相勤、病身二付御奉公難相勤罷成候処、其節

悴幼年二御座候二付親類之内渡邊助之進与申者私

養子仕跡代番奉願被 仰付三年相勤申候処、右養

子不行跡之儀御座候二付儀絶仕、再勤仕度之旨

御所司代土屋相模守殿御在役、頭曲淵市太夫支配

之節奉願上候処被為 聞召届、願之通被 仰付、

元禄三庚午ノ年迄四年再勤仕、御所司代内藤大和

守殿御在役、頭曲淵市太夫支配之節病氣再発仕、

実悴江跡代番奉願被 仰付候、最初父代番被 召

出候節⁶前後三拾壹年相勤、病身二付相願御奉公

引退、元禄十丁午丑年九月病死仕候、父代番被

召出候節之月相知不申候、

一祖父

渡邊 勘右衛門

常憲院様 御代元禄三庚子年 御所司代内藤大和守殿

御在役、頭曲淵市太夫支配之節、父渡邊勘右衛門

跡代番二被 召出、享保八癸卯年頭秋山吉右衛門

支配之節同心支配役被 仰付、同二十乙卯年迄四

拾六年御奉公相勤、病身二付相願御奉公引退、享

保式拾乙卯年十月病死仕候、父代番二被 召出候

節之月不相知不申候、

一父

渡邊 一学

有徳院様 御代享保二十乙卯年八月 御所司代土岐丹

波守殿御在役、頭秋山吉右衛門支配之節父渡邊勘

右衛門跡代番二被 召出、寛保元辛酉年迄七年御

奉公相勤、病身二付相願御奉公引退、延享三丙寅

年九月病死仕候、

右高祖父渡邊勘右衛門万治戊戌年被 召出、私迄

五代相続仕、当亥年迄都合九拾八年御奉公仕候、

以上、

宝曆五乙亥年十二月

渡邊儀右衛門

七

由緒書

御切米

現米六拾壹石三斗五升

二條 御城御門番之頭
金田仁十郎組與力
本国參河 生国山城 鈴木要助

甲前立物金輪拔

指物二幅四半地花色自分紋最初組被 召出候節

被為 仰付、至唯今二奉守 仰伝来仕候、

当 御代私儀寛延三庚午年 御所司代松平豊後守殿御

在役、当頭金田仁十郎支配之節、兄鈴木文左衛門跡代番二被 召出、当亥年迄六年御奉公相勤罷在候、

一祖父

鈴木四郎右衛門

嚴有院様 御代延宝元癸丑年五月 御所司代永井伊賀守殿御在役、頭鈴木長左衛門支配之節組與力二被召出、元禄十二己卯年迄二十七年御奉公相勤申候処、同年六月 御所司代松平紀伊守殿御在役、頭山岡七左衛門支配之節組減少被為 仰付御暇被下牢人仕、諸御組割入奉願候処、被為 聞召届、同年十一月 御所司代松平紀伊守殿御在役、頭柘植三之丞支配之節当組江割入被為 仰付、正徳元辛卯年五月迄前後三拾九年御奉公相勤、病身二付相願御奉公引退、享保八癸卯年九月病死仕候、

一父

鈴木八郎右衛門

文昭院様 御代正徳元辛卯年五月 御所司代松平紀伊守殿御在役、頭小西助右衛門支配之節、父鈴木四郎右衛門跡代番被 召出、享保十一丙午年頭秋山吉右衛門支配之節同心支配役被申付、同十五庚戌

年迄五年役義相勤、病身二付役儀御免被下、享保十八癸丑年四月迄十三御奉公相勤、病身二付相願御奉公引退、元文三戊午年八月病死仕候、

一兄

鈴木 文左衛門

有徳院様 御代享保十八癸丑年 御所司代牧野河内守殿御在役、頭秋山吉右衛門支配之節、父鈴木八郎右衛門跡代番二被 召出、寛延二己巳年八月迄拾七年御奉公相勤、病身二付相願御奉公引退申候、右祖父鈴木四郎右衛門延宝元癸丑年被 召出、私迄四代相続仕、当亥年迄都合八拾三年御奉公仕候、以上、

宝曆五乙亥年十二月

鈴木 要助

八
由緒書

御切米

現米六拾壺石三斗五升

本國甲斐
生國山城

二條 御城御門番之頭
金田仁十郎組與力
小倉兵橘

甲前立物金輪貫

指物二幅四半地花色自分紋最初組被 召出候節被為 仰付、至唯今奉守 仰伝来仕候、

当 御代私儀寛延四^{辛未}年十月 御所司代松平豊後守

殿御在役、当頭金田仁十郎支配之節、父小倉源八郎跡代番二被 召出、当亥年迄五年御奉公相勤罷在候、

一 高祖父 小倉 弥左衛門

大猷院様 御代寛永十六己卯年 御所司代板倉周防守

殿御在役、頭寛新太郎支配之節組與力二被 召出、翌庚辰年組頭役被仰付、正保三^{丙戌}年迄八年御奉公相勤、病身二付相願御奉公引退、慶安四^{辛子}卯年

十月病死仕候、最初被 召出候節之月相知不申候、
一 曾祖父 小倉 十右衛門

大猷院様 御代正保三^{丙戌}年正月 御所司代板倉周防

守御御在役、頭寛新太郎支配之節父小倉弥左衛門跡代番被召出、筒井治左衛門支配之節延宝四^{丙辰}年組頭役被仰付、元禄四^{辛未}年迄四拾六年御奉公相勤、病身二付相願御奉公引退、宝永元^{甲申}年九月病死仕候、

一 祖父 小倉 浅右衛門

常憲院様 御代元禄四^{辛未}年十二月 御所司代小笠原

佐渡守殿御在役、頭曲淵市太夫支配之節父小倉十右衛門跡代番二被 召出、元禄十五^{壬午}年頭柘植三之丞支配之節同心支配役被申付、享保四己亥年十月迄貳拾九年奉公相勤、病身二付相願御奉公引退、元文二丁巳年九月病死仕候、

一 父 小倉 源八郎

有徳院様 御代享保四己亥年十二月 御所司代松平伊

賀守殿御在役、頭曲淵十左衛門支配之節父小倉浅右衛門跡代番被 召出、享保貳十乙卯年頭秋山吉右衛門支配之節同心支配役被申付、寛延四^{辛未}年九月迄三拾三年御奉公相勤、病身二付相願御奉公引退申候、

右高祖父小倉弥左衛門寛永十六己卯年被 召出、私迄五代相続仕、当亥年迄都合百拾七年御奉公仕候、以上、

宝曆五乙亥年十二月 小倉 兵 橘

九
由緒書

御切米

現米六拾壹石三斗五升

二條 御城御門番之頭
金田仁十郎組與力
本國出羽 野条佐五右衛門
生國山城 当亥貳拾貳歲

甲前立物金輪貫

指物二幅四半地花色自分紋最初組被 召出候節

被為 仰付、至唯今二奉守 仰伝来仕候、

当 御代私儀宝曆三癸酉年四月当 御所司代酒井讃岐

守殿御在役、当頭金田仁十郎支配之節、当組二相

勤罷在候父金原政之丞手前罷在候処、再從弟野条

泰次郎大病相煩御奉公難相勤、外二跡代番可奉願

近親之者無御座候二付、再從弟之続ヲ以跡代番奉

願候処、願之通被 召出、当亥年迄三年御奉公相

勤罷在候、

一曾祖父

野条 忠右衛門

殿有院様 御代延宝四丙辰年 御所司代戸田越前守殿

御在役、頭筒井治左衛門支配之節組與力二被 召

出、元禄九丙子年迄貳拾壹年御奉公相勤、病身二

付相願御奉公引退、宝永六己丑年八月病死仕候、

最初被 召出候節之月相知不申候、

一祖父

野条 小左衛門

常憲院様 御代元禄九丙子年正月 御所司代小笠原佐

渡守殿御在役、頭山岡七右衛門支配之節父野條忠

右衛門跡代番被 召出、同十二己卯年迄四年相勤

申候処、同年六月 御所司代松平紀伊守殿御在役、

頭山岡七右衛門支配之節組人数減少被為 仰付御

暇被下牢人仕、江戸御表諸御組割入奉願候処、被

為 聞召届、翌庚辰ノ年三月 御所司代松平紀伊

守殿御在役、頭柘植三之丞支配之節当組へ割入被

為 仰付、享保八壬卯年同心支配役被申付、同十

一丙午年迄前後三拾壹年御奉公相勤、同年九月病

死仕候、

一父

野條 貞之進

有徳院様 御代享保十一丙午年 御所司代牧野河内守

殿御在役、頭秋山吉右衛門支配之節父野條小左衛

門跡代番被 召出、同貳拾乙卯年迄拾年御奉公相

勤病死仕候処、悴野條泰次郎儀幼年二付弟西村唯

八江跡代番奉願候処、其時之 御所司代土岐丹後

守殿御在役、頭同支配之節願之通被 仰付、延享

三丙寅年迄拾三年御奉公相勤、御所司代牧野備後

守殿御在役、頭浅井半兵衛支配之節奉願泰次郎被召出、唯八儀者相願御奉公引退申候、

一再從弟

右野條貞之進侍

野條泰次郎

当 御代延享三丙寅年四月 御所司代牧野備後守殿御在役、頭浅井半兵衛支配之節、伯父西村唯八跡代番二被召出、宝曆三癸酉年三月迄八年御奉公相勤、病身二付相願御奉公引退、同四甲戌年十一月病死仕候、

右曾祖父野條忠右衛門延宝四丙辰年被 召出、私迄五代相續仕、当亥年迄都合八拾年御奉公仕候、以上、

宝曆五乙亥年十二月

野條佐五右衛門

十
由緒書

御切米

現米六拾壹石三斗五升

二條 御城御門番之頭
金田仁十郎組與力
本国紀伊 藤田 彦十郎
生国山城 当亥式十歲

甲前立物金輪拔

指物二幅四半地花色自分紋最初組被 召出候節

被為 仰付、至唯今奉守 仰伝来仕候、

当 御代私儀藤田丈之助養子二仕置候处、宝曆三癸酉

年当 御所司代酒井讃岐守殿御在役、当頭金田仁十郎支配之節、八月養兄藤田源之進儀病死仕候二付、同年十月跡代番二被 召出、当亥年迄三年カ御奉公相勤罷在候、

一先祖

藤田 奎右衛門

大猷院様 御代寛永七庚午年 御所司代板倉周防守殿

御在役、頭春日左衛門支配之節組與力被 召出、万治元戊戌年迄貳拾九年御奉公相勤、病身二付相願御奉公引退、万治三庚子年九月病死仕候、最初被 召出候節之月相知不申候、

一高祖父

藤田 八兵衛

嚴有院様 御代万治元戊戌年 御所司代牧野佐渡守殿

御在役、頭本間五郎左衛門支配之節父藤田奎右衛門跡代番被 召出、貞享二乙丑年迄貳拾八年御奉公相勤、病身二付相願御奉公引退、貞享三丙寅年三月病死仕候、父跡代番被 召出候節之月相知不申候、

一曾祖父

藤田源四郎

有徳院様 御代享保元丙申年十月 御所司代水野和泉

常憲院様 御代貞享二丙丑年 御所司代土屋相模守殿

守殿御在役、頭曲淵十左衛門支配之節兄藤田儀左

御在役、頭本間五郎左衛門支配之節父藤田八兵衛

衛門跡代番被 召出、享保十五庚戌年同心支配役

跡代番被召出、元禄五壬申年迄八年御奉公相勤、

被申付候、式拾年同心支配役相勤、寛延三庚午年

同年六月病死仕候、父代番被 召出候節之月相知

迄三拾五年御奉公相勤、病身二付相願御奉公引退

不申候、

申候、

一祖父

藤田儀左衛門

一兄

藤田源之進

常憲院様 御代元禄五壬申年 御所司代小笠原佐渡守

当 御代寛延三庚午年二月 御所司代松平豊後守殿御

殿御在役、頭鈴木市兵衛支配之節父藤田源四郎跡

在役、当頭金田仁十郎支配之節、父藤田丈之助跡

代番被召出、宝永四丁亥年迄拾六年御奉公相勤、

代番被 召出、宝曆三癸酉年迄四年御奉公相勤、

病身二付相願御奉公引退、寛延二己巳年九月病死

同年八月病死仕候、

仕候、父代番被召出候節之月相知不申候、

右先祖藤田奎右衛門宝永七庚午年被 召出、私迄

一伯父

藤田儀左衛門

八代相続仕、当亥年迄都合百式拾年御奉公仕候、

常憲院様 御代宝永四丁亥年 御所司代松平紀伊守殿

以上、

御在役、頭小西助右衛門支配之節父藤田儀左衛門

宝曆五乙亥年十二月 藤田彦十郎

跡代番被召出、享保元丙申年迄拾年御奉公相勤、

享保元丙申年八月病死仕候、父代番被 召出候節

上書久留半次郎様

之月相知不申候、

金田仁十郎様

一父

藤田丈之助

御目附稻生下野守・牧野織部^左書状到来、組与力

東御役所
小林伊豫守

御扶持方有之候哉有無儀委細書付差越候様各方江
茂別帑書付相達候様申来候ニ付、則右書付写宅通
差越候、吟味之上委細書付拙者御役所へ御申聞可
有之候、以上、

三月九日 但シ組由緒并人別由緒書者江戸御表

乙亥年被 仰出、冬乙翌年子ノ年指
出候也、町奉行御役所江御頭乙被調
渡候、西御役所証文方三浦小藤太江
及応対候関戸久之丞被参候、三浦江
兼而丹羽内談申合置候、是ハ人別由
緒ニ跡番与力ニ不召抱と可認旨下書
手本出候、依之西組者前々乙代御番
と認候、此度も先格之通認度段申談、
難渋之所漸跡代番与認候様相成候也、
諸組一統ニ跡番与力同心と相成候得
共、両組ハ代番と認差出候、

書付写

二條御城御門番之頭組

並高現米六拾壹石三斗五升 與力

右並高之儀去子年被書出相分リ申候、御扶持方者無
之哉、若御扶持方有之候ハ、委細書付可被差越候、
以上、

二月

稻生下野守
牧野 織部

覚

當時拜領高

現米六拾壹石三斗五升宛

二條御門番之頭
金田仁十郎組
與力拾騎

右之外御扶持方無御座候、以上、

丑

三月

右者此度江戸御表乙御尋ニ付差出候書付之扣也、

宝曆七丁丑年三月九日

宝曆十三癸未年五月廿六日御組内ニ永之御暇等ニ而明
跡江御入人有無之事御所司代御尋ニ而書出シ候様ニ
被申渡、往古之訳相除御組分後之例書出申候、左之
通、

一 南御組与力城彦之進先祖城庄左衛門
由縁之者ニ付御組与力奉願候、

内 藤 金右衛門

享保九甲辰年四月

御所司代松平伊賀守殿御在役、御頭秋山七右衛門殿
御支配之節、石川三助不調法ニ付永之御暇被 仰付
候、明跡江御抱入被 仰付候、當時相勤罷在候内藤
平学家筋ニ而御座候、

一 当御組与力内藤金右衛門

次男

内藤一郎右衛門

元文二丁巳年十月

御所司代土岐丹後守殿御在役、御頭秋山吉右衛門殿
御支配之節、加藤弥五右衛門不調法ニ付永之御暇被
仰付候、明跡江御抱入被 仰付候、當時相勤罷在候、
右之通ニ御座候、以上、

但シ元禄十二己卯年御組分以後御入人等無御座候、

未五月

御組与力拾騎

右之通之文談ニ而半切ニ認上包有リ差出申候、
同心仲々問之扣別帳ニ有リ、

上包ニ茂御組与力

拾騎と

奉願口上書

私儀年号父誰代番御替被為 召出御奉公相勤申候、
然処当何月与大病相煩続命難仕跡ニ御座候、依之
私従弟違誰当何ニ何十歳ニ罷成候、此者私代御番
ニ被 召出被 下置候様ニ奉願候、両親并家族共
養育仕度奉存候、偏御憐愍を以願之通被為 仰付
被 下置候者難有仕合奉存候、日本之神以病氣偽
無御座候、右之趣被仰上可被下候、以上、

何之誰

何月

印形

月番兩人宛

拾四年以前迄者右之通一紙ニ而被仰付相済来申候、
以上、

右者秋山吉右衛門・松波五郎右衛門支配之節迄者
與力・同心代御番願書右迄通ニ而、文言等茂右之
通ニ而相済来候処、久留半次郎・浅井半兵衛支配
之節当人願書并仲々問連判月番與力添書仕指出候
様ニ頭被申渡候ニ付、再応迷惑仕候段相願申候得
共、曾而聞届不被申、願書文言等も被致加筆無是
非左之通相改、只今ニ至迷惑至極仕候、何卒秋山

吉右衛門・松波五郎左衛門支配之節之通^二而、当人願書宅通并親類書相添、文言等茂前々之通^二而奉願度奉存候、十四年以来左之通^二相改申候、

奉願口上書

私儀年号何月 御所司代様御在役、御頭誰殿御支配之節父跡代番被為 召出、当何年迄何年御奉公相勤申候、然処一昨年早春^{（龜）}何々病相煩御番御断申上引籠服藥養生仕、何月漸出勤仕候処、当夏頃^{（龜）}何病再発仕候二付、醫師誰之療治相頼養生仕候得共、追日相勝不申迷惑至極仕候、御奉公可相勤^{（龜）}躰二無御座候間、私儀御暇被 下置可罷成御儀二御座候者、忝同苗誰儀何何拾歳二罷成候間、此者御吟味之上跡代番被 召出被 下置候様奉願候、願之通被 仰付被 下置候者難有奉存候、右之趣宜被仰上可被下候、以上、

何月

月番宛

何之誰印形
当何二何十才

口上之覚

誰病氣二付御奉公難相勤御暇奉願候、依之私共立合吟味仕候処、病躰二相違無御座候間御暇被 下置可罷成御儀二御座候者、同苗誰儀御奉公可相勤者二御座候間、願之通被 仰付被 下置候様二仕度奉願候、以上、

何月

月番與力

何之誰
何之誰

奉願口上書

誰儀病氣二付御暇奉願候、依之吟味仕候処、申上候病躰二相違無御座候間、御暇被 下置可罷成御儀御座候者、同苗誰儀御奉公可相勤者二御座候間、願之通被 仰付被 下置候様二一統二奉願候、以上、

何月

與力仲ヶ間

九人連印

頭之宛所

一 右之外親類書相添差出申候、但親類書之儀者十四年以前茂同前ニ差出申候儀ニ御座候、

此内ニ同心願書之形控有之候、

(同心願書形控その一)
「
」
覚

大岡金兵衛様組小頭同心

林源左衛門

当寅六十六歳

右源左衛門儀依病氣御奉公難相勤候ニ付、支配与力吟味書相添願書差出候ニ付吟味仕候処、願書之通病軀相違無御座候、右源左衛門忝同苗源藏儀代御番相願申候、依之源藏招呼吟味仕候処、御奉公も可相勤者ニ相見へ申候ニ付、則指出候願書奉入貴覽候、願之通申渡候様仕度奉存候間、此段奉伺候、以上、

十月 大岡金兵衛

与力同文言ニ而支配与力ト有之候処、月番与力ト相認候、

(同心願書形控その二)

「宝曆六丙子年七月十三日

二条御城御門番之頭組

並高現米六拾壹石三斗五升宛

与力

但シ前々御入人等無之

御抱入之者ニ而

書面之御切米無不同被 下置候、忝部屋住被召出候儀無之候、

同

並高現米拾石三人扶持 同心

但シ先年八人被 召抱候者現米拾三石六斗宛被下

置相勤候、忝部屋住ヨリ被 召出候儀無之候、

右者從江戸御表之御書付

支配之内

御目見以下之者場所並高并部屋住被新規ニ被 召出候者、並高之儀寛延元辰年御目附衆より申来候指出下書附写到来候、別紙之通支配之内御目見以下之者場所並高當時も相違無之候哉、若シ相違も有之候歟又者此外洩候役

名并新役等茂有之候者、其訳委細別紙書付

早々差遣可申候、尤別紙之通相違茂無之候

ハ、其趣書付可差出旨、右者宮内少輔殿御用

ニ付申越候由、尤支配之内又支配有之候ハ、

右支配之者共不残書付差出可申旨、御目付稻

生下野守・牧野織部^〆申来候、則從江戸表致

到来候別紙書付写一通宛相達候、各支配之分

書付留置、吟味之上伊豫守御役所江早々否可

被申聞候、以上、

七月十三日

稻垣能登守

小林伊豫守

久留半次郎様

金田仁十郎様

右者諸組由緒并人別由緒書付差出候様ニ被 仰出、

去ル亥ノ十一月^〆度々町奉行懸リニ而、則能登守

殿組与力証文役三浦小藤太懸り聞合、子三月五日

迄ニ清書出来差出候处、七月十三日江戸御表^〆右

之御書付ニ而御尋御座候ニ付、先達而差上候書付

之通無相違趣御頭江及御返答候也、

〔同心願書形控その三〕

其節之写有之

請取申御切米之事

合米合百廿石者

但京升也

右是者坪内藤七郎ニ御預ケ之與力六騎御切米、此
米三百六拾石ヲ以組売人ニ付六拾石宛之内夏為御
給米三分一請取相渡申候、藤七郎未登リ不申候ニ
付、戸田越前守殿以御差図我等手配ニ而請取申处、
仍而如件、

延宝六年午六月日

筒井治左衛門印

藤井勘兵衛殿

高橋次郎左衛門殿

尾崎五右衛門殿

〔同心願書形控その四〕

口上書

林源左衛門儀病氣ニ付御奉公難相勤御座候、依之

吟味仕候处、申上候病躰毛頭相違無御座候間、源

左衛門忝同苗源藏儀御奉公可相勤者ニ御座候間、

願之通被 仰付被 下置候様ニ仕度奉存候、以上

寅

八月

鈴木五郎右衛門
佐治長兵衛

「

奉願口上書

今度南御組與力村田三右衛門儀眼病氣差重候ニ付、
甥村田權太兵衛江代御番之儀奉願候、依之拾五年
以前迄奉願候願書之通相認御願申上度旨一統ニ奉
願候、西御組之儀者差別無御座御取扱被成下候御
儀御座候間、当御組於茂代御番奉願候節者拾五年
以前迄之通当人之願書一通ニ而願之通被 仰付被
下置候様ニ偏奉願候、以上、

寅

八月

仲ヶ間
拾人連印

頭宛

奉願口上書

私儀何之誰殿御支配之節、年号何年何月父代御番被
召出、当何之年迄何十年御奉公相勤、先祖何ノ私

迄何代ニ而都合何十年御奉公相続仕候、然ル処
何年以來何病相煩種々養生仕候処、当節指重リ醫師
何ノ誰々相頼服藥仕候得共難治之病症ニ御座候趣申
候、依之私悴同苗誰儀当何ニ何十何歳罷成申候間、
此者代御番被為 仰付被 下置候様奉願候、右之病
氣日本之神祇偽ニ而無御座候、以御憐愍を以此者代
御番被為 仰付被 下置候者難有仕合奉存候、右之
趣宜被 仰上可被下候、以上、

何

何月

月番兩人宛

何誰書判

当何ニ何十何歳

西御番頭ノ之添書文言写

此度私共組之者願之義十五年以前之通当人之願書迄
通ニ而相済候様仕度段相願候、尤組之者共ノ私共江
指出候願書並例書奉入貴覽候、可相成義ニ御座候者
先々之通申付候様ニ仕度奉存候、依之右之段奉伺候、
以上、

寅
八月

金田仁十郎
大岡金兵衛

戻シ可申旨南組一統江申談候、是
最初反故也、

御所司代付紙

可為伺之通候、

右之御付紙ニ而九月朔日御渡被成下候、西御頭方御
挨拶ニ者御用向御取込ニ付、是迄御延引被成候趣之
御口上ニ而先達而西組ニ差出置候例書等被成御差戻、
先格願書之通文言等認替御持參可被成様ニ御頭方江
被仰渡、依之願書先格之文言ニ認替二日ニ御頭方被
成御持參候、早速相濟村田権太兵衛被 仰付候、

御所司代 松平右京太夫殿

宝曆八戊寅年九月

表御用人番頭

石嶋弥一左衛門

二 大野弥八郎

根元此仁聞込ニ而取計之上相濟候

四 関口安左衛門

三 関源八

西組村田三右衛門息権太兵衛代番
願ニ付六月廿九日南組中川沖之助
宅江金原政之進・丹羽次郎兵衛・
関戸久之進參り、先々之願形も取

北御組同心明扶持並御切米之覺

一享保十一丙午年九月柘植重三郎被 召出候処、漸一
卜御番相勤病死仕、親類之内代御番可奉願相応之者
無御座、断絶被 仰付候、同年十一月服部喜内被
召返候、

一四斗三升 午 十月御扶持米 御藏駄賃引

三石三斗壹升六合三勺 午 十月御切米 右同断

米合三石七斗四升六合三勺 当時服部弾次小屋

此代銀百目壹分

柘植重三郎明跡

一享保十七年壬子年正月宮川新平不行跡ニ付御暇被

下置候、明跡江同年七月城市之進被 召出候、

一三石貳升七勺 子正月ニ六月迄閏月入七ヶ月分
御扶持米 御藏駄賃引

一六石六斗三升六勺 子二月五月兩度御切米御藏駄賃引

米合九石六斗五升壹合三勺 當時楠林之進小屋

此代銀四百貳拾目壹分九厘九毛五 宮川新平明跡

御扶持方御切米
代銀也

両口合古銀五百貳拾目貳分九厘九毛五
内 同銀百四拾六目五分

北御役屋敷付
数鎗十筋代

但シ御所司代牧野河内守殿御在役之節

享保十七壬子年秋山吉右衛門殿御調被成候、

引残古銀三百七拾三目七分九厘九毛五 但五割増

右之銀高元文元年文字銀二引替

増歩銀百八拾六匁九厘九毛

右両口合文銀五百六拾目六分九厘八毛

一寛保三癸亥年八月村田權右衛門不行跡ニ付御暇被

下置候、明跡江同年十一月木寺伴内被 召出候、

一八斗七升

此銀五拾八匁貳分三厘

亥九月十月二ヶ月分
御扶持米御藏駄賃引

都合文銀六百拾八目九分貳厘八毛五

亥十月御切米三石三斗三合

右之外ニ文銀貳百三拾九匁八厘壹毛者
十一月御扶持米四斗四升八合之代銀也

右之銀子者

十一月木寺伴内被 召出候ニ付伴内江被 下置候、

宝曆三癸酉年六月金田仁十郎殿江差出候書付之扣也、

但シ右明キ扶持金支配江預り候節、文言之扣左之通

相認候事、

合[㊤]金拾[㊤]兩也、

右者御組同心明キ扶持金ニ御座候處、私共江被成御
預ケ慥ニ奉預候、為後証仍而如件、

宝曆八戊寅年正月

金田仁十郎殿

金原政之丞印
丹波次郎兵衛印

右預り一札者去宝曆七丁丑年十二月内藤金右衛門引跡
役拙者江同心支配役被申付候故、証文名前相改め候様
仁十郎殿^〆被申渡、左之通ニて相改メ差出候也、

但宝曆十一庚辰年金田仁十郎殿御參府ニ付卯ノ年十

二月右預り一札改メ置候様ニ被申渡、右同文言ニ而

担改メ差出引替候也、

一仁十郎殿辰年二月八日御參府御出立ニ而、御在府中

御願ニ而同年七月廿二日願之通御退役被 仰付候、

八月三日南御頭大岡金兵衛殿^〆被仰聞候、然ル上右

明キ扶持金^〆御支配江御預り可被成旨被申聞、十

月四日金兵衛殿御役宅江兩人持參、用人立会相改メ

兩人封印ニ而金兵衛殿^〆御預ケ申、金兵衛殿御預り

証文即金兵衛殿御印形ニ而御座候、左之通文言扣、

覚

金田仁十郎元組同心明キ扶持金

金拾両

右之金子仁十郎跡役被 仰出跡役罷登り候迄慥

ニ預り置候、以上、

辰十月

大岡金兵衛印

金原政之丞殿

丹羽次郎兵衛殿

右之通被相認御渡被成候也、

一仁十郎殿跡役浅原又右衛門殿辰年廿二日被 仰付、

翌年巳年三月十五日御上着御座候、其後明キ扶持金

御引渡段々御延引、漸十月廿九日御渡御座候、先達

而御預之節御証文御引替可相済之处、為念支配^レ御

取証文差出呉候様ニ被申聞候、尤例格^茂無之候得共

御頼之御挨拶旁以差構^ニ茂不相成筋故認差出候、御

引渡之刻金原姓当番故御用人石田生被立会候様ニ申

入、即石田生致同伴南御役宅^ニ而御用人宇佐美平馬

立会相済候、

覚半切ニ認、無上包

金拾両也

右者御組同心明キ扶持

金先達而御預り被持置候

处、此度御引渡相済候ニ付

慥ニ請取申上候、以上、

巳 金原政之丞

十月廿九日丹羽次郎兵衛

大岡金兵衛様御内

宇佐美平馬殿

預申一札之事

金拾両也

右者当組同心明扶持金任先例且那方江預り置申所実正

也、為念証文仍如件、

宝曆十一巳十一月

石田定右衛門印

金原政之丞殿

丹羽治郎兵衛殿

表書之通相違無之者也

十一月朔日兩人罷出明キ扶持

金御頭^方御預り証文請取□金

子御預^ケ申候、尤此金子外々

江預置、年々利金ヲ以御頭方

御替^リ之節、江戸下り同心用

脚ニ仕度候間、永ク御組江御

渡被下、万^一御吟味^{或者}

公儀^方御用と御座候節者右元

金拾両者何時^ニ而差出可申旨

段々申置候、石田定右衛門隨

分相心得罷在候、当御頭江相

尋候上^ニ而不及延引御返答可

中^ト之儀^ニ而罷歸候、御頭御

預り証文左之通

浅原又右衛門印

右之通文言ニ而福村紙上包美濃紙

上包

明扶持金証文

浅原又右衛門内

石田定右衛門

明和二乙酉年八月代御番相願、廿六日ニ願之通被 仰付、右明扶持金御頭之預り証文同役金原氏江相渡申候、尤跡役関戸十兵衛未役儀不被申渡候ニ付、金原氏計之及応対候也、八月廿六日召自宅江仲ヶ間一統被相集候故、幸於席下ニ相渡申候也、

北御組御支配之最初元祖柘植三之丞殿
并御組伊賀侍式拾人被為 召出候由緒傳記
権現様参劔

織田信長公江為御見舞与御上洛有リ、参州岡崎之城主穴山梅雪御同道之由也、信長公種々御馳走有リト云々、御次手ニ泉劔堺浦為御見物之穴山殿御同道ニ而被為成 御下向、彼地御逗留之内於京都丹劔龜山城主明智日向守光秀企逆心、天正十壬午

年六月二日信長公被成御座候本能寺江押寄大軍

白紙封印開見御用捨（以下「」は白紙封印の部分）

「を以取巻候故信長公御生害ニ付、京都者勿論国々及騒動ニ、依之 権現様本道還御不被為成、山城国宇治田原ヲ御通江劔信樂江御出也、其節御徒多、多羅尾五郎左衛門与云者供奉仕、父多羅尾峯閑信樂ニ居住仕ニ付、彼宅江入御被為成御一宿之由、峯閑種々御馳走奉申上ト也、彼宅夜半頃出御伊賀越ニ勢劔江御出、白子ヨリ三州江還御之御積也、然ニ伊賀伊勢ノ堺鹿伏兎ト云所ニ関ヲ居住来ヲ差留候ニ付、伊劔下柘植ノ西光」

寺江被為成 御入、当所之者江関所御案内之儀被為 仰付、此時元祖柘植三之丞殿始彼是七八人御供申上、鹿伏兎を御通り勢劔白子迄供奉、何茂是三而御暇被 下置、御出世之節可被為 召出旨御約束、品々 御朱印拝領候而伊劔江被召帰、白子ハ御船ニ被為 召渡而遠劔江還御之由也、

葉茶石迎ノ多羅尾ト云

但シ穴山梅雪ハ一里計御先江被参、普賢村ニ而野

武士共道ヲ支及難儀生害也、此所墓有之由、

権現様ハ普賢寺越ニハ御出無御座、宇治田原江御出之由也、

右伊賀越還御之依御忠節二元祖柘植三之丞殿慶長四己亥年被為濃脇関ケ原慶長五年召出御陣前年御知行可被下置候

間望可申旨上意御座候処、三百石拝領仕度由御申上、則望之通被為 仰付、且又組之者式拾人御預ケ可被為成候、召抱可申旨被為 仰付、三之丞殿被申上候、組之者ハ私在所朋友ヲ召連同上可仕之由被申上候時、其者共ニハ何程可被下置与被 仰出候得者、御徒並ニ被為 仰付可被下置之旨御申上其時之御徒者三人扶持十石也、則御徒並ニ被為 召出、三人扶持ニ拾石宛被下置、三之丞殿へ御預ケ之事、

伏見 御城御番被為 仰付相勤

御城代 山口駿河守殿

御定番 春日下總殿

御門番頭 柘植三之丞殿

其後寛永元甲子年御城京都二条江被為移、西之御

門御番所相勤也、御組式拾人罷在候御長屋者、伏

見 御城之内百間御長屋百間御長屋之内表被為引表御長屋六軒奥御長屋十四軒御建被下置、御城内御破損御奉

行御見分有之、累年御修覆被為 仰付、元禄五壬

申年御番頭酒井右京亮殿一柳土佐守殿御在番之節迄御修覆有之、其後ハ相止候也、

一農脇関ケ原御陣元祖柘植三之丞殿御組被召連御供、

撰劔大坂御陣右同断、但シ大坂表ニ而ハ三之丞儀ハ組召連何レ之手成共無構勝手次第働可申旨被為 仰付、御組之者大筒ヲ以相働、乾ノ櫓打崩候由申伝也、

一肥后天草一揆之節御所司板倉周防守殿依御差図、二代目三之丞殿御組被召連、

御本丸御具足御借被下大坂迄下向候処、松平伊豆守殿於大坂被仰候者、二條 御城之御番ニ而候処天草江下向候事無用之由御差図也、三之丞殿被仰候者御所司周防守殿御差図ニ而御座候、是非共下向可致之由御申ニ付、然ラハ此方人数乘り候船計出シ、其外之船ハ一艘茂出シ申間敷、御船手へ御

申付船留メ有之候故、無是非京都江御帰之由也、

御本丸御具足者

御タメシ具足 桶カハ胴紺糸威甲頭形リ前立もの金之輪貫也、寛永十四年十二月二下向ノ由

台徳院様御遺物之御銀御組貳拾人老人ニ付銀「ムシ」

枚宛、寛永九^{壬申}年十二月頂戴仕候事、

大猷院様 御代寛永^{十二カ}年^亥年拝借金被為 仰付、二代目

柘植三之丞殿御支配正保元年甲申年迄八ヶ年分連々上納、残り二ヶ年分ハ水野甚五左衛門御支配之節、寛文六丙午年迄二貳拾八人之拝借金高都合貳百五拾両上納皆済也、仲ヶ間小頭役芝田兵左衛門拝借金為 上納江戸江罷下、御勘定所御請取之御証文者水野甚五左衛門殿ニ有之由也、

但三之丞殿御組者最初貳拾八人也、八人ハ御城代之御組ヨリ加リ貳拾八人ニ成、右拝借金貳百五拾両之上納者元祖三之丞殿^ハ二代目三之丞殿・荒川又六郎殿迄仲ヶ間明御扶持・切米年々ニ相統有之候ニ付、小頭三人相對仕、代々之御頭江御預ケ申置候也、右拝借金ハ此銀子を以上納相済候也、御城代渡邊山城守殿御組三拾人モ御銀頂戴、同年之拝借モ^{乙亥}年被為 仰付、上納ハ三之丞殿

御組へ被 仰付候而、柘植殿元祖貳拾人ト一所ニ上納也、貳拾八人之拝借金之人別之書付別紙ニ有之、御城代御組八人ノ由緒左ニ記、

一 柘植氏ハ元米平家之侍弥兵衛宗清之末孫也、日置・福地・勝嶋等同姓也ト云々

一 寛永元 子年渡邊山城守殿二條御城代被為 仰付御組同心三拾人被召連御登在勤也、同十二^{乙亥}年御城代相止、山城守殿江戸江御

御帰リ□□ハ同十三丙子年御番頭□谷撰津守殿・保科彈正殿御支配ニ而西之御門 御番所相勤也、右三拾人之者十二人大坂御材木方江被為 仰付、拾人ハ御鉄炮奉行組、残り八人ハ寛永十九^{壬午}年柘植三之丞殿御組江被為 加江、從是北御組貳拾八人ニ而相勤也、

但山城守殿御在勤之内ハ江戸^ハ三拾人宛在番有之、一ヶ年切ニ交代之由、右三拾人番衆之小屋御本丸高麗御門堀際ニ有之ト傳也、且又山城守殿駿府^ハ二條御城代被為 仰付之由、右御組三拾人ノ同心罷在候小屋ハ伏見御城内之中御長屋ヲ被為引被下置旨被為仰付之由、又曰寛永十一甲戌年家光公御上洛アリ、山城守殿御願被仰上候ハ、柘植

三之丞組私組御奉公筋甲乙無御座候得者三之丞組並
ニ御扶持切米可被下置之旨御願上候処、御取上ケ
無御座ニ付、還御之節御粟田口迄供奉有之、此所ニ
而茂右之御願申上候得者、還御以後可被為、仰付之
由ニ而其^(以後力)□□三之丞御組並被為、仰付候也、「ムシ」
持切米十石三人扶持「ムシ」春ハ無之、三之丞殿御
組ハ最初御役並被「ムシ」罷出候節三人扶持十石宛
被下置候也、其以後「ムシ」出来候二條廻り之組付
何茂三之丞殿組並ニ成り候事は分明ノ説也、
同心御切米ハ七石ニ式人扶持也、
渡辺山城守殿江戸へ御歸り、寛永十二乙同十三丙子
年御番頭御支配成候迄之間者御所司代御支配ニ而有
之候由、

一元祖柘植三之丞殿并御組貳拾人

權現様 御代慶長七己亥年諸御組之最初ニ被為 召出、
享保十二丁未年迄百廿九年以來御奉公相勤候御組
也、

常憲院様 御代元禄十二己卯年北御組御支配鈴木市兵
衛殿御役被 召上江戸へ御歸り候、元組與力・同
心貳拾八人南御組与力貳拾四騎同心拾五人ハ御支
配山岡七右衛門殿也、於御役屋敷ニ美濃部彦左衛
門殿・柘植三之丞殿^{元祖方}四代也御兩人江南組与力同心御

引渡之節、与力三拾人之内拾人御減少被為 仰付、
殘而貳拾人ハ^(兩カ)御組へ十騎宛被為 分々、同心四
拾三人^(之内)「ムシ」貳拾人宛南御組江御分被為 遊、殘
三人ハ御減少ニ而早速伏見建部内匠守殿御組江割
入被為 仰付、南組之者東西御門御番所無差別可
相勤候、御減少ニ付人少ニ罷成候間、御番等弥念
ヲ入相勤可申候、南組ニ相殘候者共ハ御譜代同前
ニ被為 仰付候由江戸表ハ御所司忝平紀伊守殿江
被為仰遣候旨、紀伊守殿被仰渡候間難有可奉存之
由被仰渡候、勿論彦左衛門殿三之丞殿江茂右之趣
七右衛門殿被仰達候事、

但鈴木市兵衛殿元組廿八人之内式人御減少、山
内平八郎・柘植嘉助右兩人也、山岡七右衛門殿
御組ニ而耆人松尾文助也、

但シ

南御組同心仲ケ間貳拾人之内拾式人者御組分之節
迄北御組ニ罷在西之御門御番所相勤候処、元禄十
二己卯年南御組へ被為 仰付候節、山岡七右衛門

又曰柘植嘉助伊賀之内
伏見江山内平八郎御城
代組筋
松尾文助左衛門抱之者

殿当分御支配故拾貳人ノ御長屋引料之儀願上候得
共御取上ケ無御座、掃地御渡被成候ニ付、北御組
御長屋自分ニ引取小屋建致候事、

但右拾貳人之内五人ハ柘植三之丞殿廿人之組筋、
八人ハ御城代渡邊^{山カ}□城守殿御組ヨリ三之丞殿御組江
被為 加ヘ候御組筋之内七人也、残而残五人ハ御減
少三人之内也、北御組^{今御カ}元禄十二己卯年□□南御
組江被為 分ケ候拾貳人名字并「」被（以下記載欠
落）

〔書付〕 1

「 大御番拾貳組指物地色紋色

平野遠江守殿御組

黒地山紋四半

松平下野守殿御組

赤地墨紋四半

大岡越前守殿御組

紺地朱紋四半

有馬備後守殿御組

紺地金紋四半

山口修理亮殿御組

久世長門守殿御組

浅黄地白紋四半

涌井飛驒寺殿御組

赤地白紋四半

青山美濃守殿御組

紫地金紋四半

松平伊豫守殿御組

浅黄地朱紋四半

堀田若狭守殿御組

紫地白紋四半

久留島信濃守殿御組

白地朱紋四半

加納大和守殿御組

濃浅黄地白紋四半

〔書付〕 2

「 覚

柘植三之丞殿

元禄十二己卯壬九月 上京、

宝永元年甲申年十月二日迄

六ヶ年御勤、御病氣ニ⁶御願御免
右者中下ハ無御座候、

小西助右衛門殿

宝永元年甲申年十二月廿三日上京、

正徳三年癸巳迄拾ヶ年御勤、就

御病氣御願、八月三日御免、

九月三日御下向

曲淵十左衛門殿

正徳三年癸巳年十二月廿四日上京、

享保四己亥年六月十五日為御見江

参府、同八月廿八日 上京、

秋山殿御参 府相知不申候、

月番帳ニ可有御座候、御吟味

可被下候、已上

七月十八日

政之丞

└

「書付」 3

┌

寛永二十一年

当番之時

中根大隅守 預リ 都築喜兵衛
本多豊前守 林半右衛門

百目玉

申

十二月吉日

板倉周防守

正當極

柘植三之丞

異御櫓ニ有之御鉄炮之銘柄

└